

陸上競技における競技環境に関する考察

A study on an athletic environment of track and field

1K07B073-7

指導教員 主査 武藤泰明先生

倉澤直弘

副査 磯繁雄先生

第1章

現在の日本陸上競技界では選手の所属先として主なものに企業チーム・クラブチーム・学校部活動といったものがある。長距離種目の選手は、比較的多くの社会人選手が実業団に所属し、陸上競技を生活の中心において競技に専念することができる。一方、短距離・中距離・跳躍・投擲種目（以下一般種目とする）の選手は企業に所属できる選手は少なく、レベルの高い選手であっても通常業務やアルバイトによって生計を立てなくてはならないといったことが起こっている。2010年11月に行われた広州アジア大会で女子100mHに出場していた城下麗奈選手もアルバイトをしながら競技を行っていたようだ（2010年11月現在）。このことはよく注目度の差として語られ、以前より懸念されている。そこで、長距離種目・一般種目の差を示し、その理由を解明すること。また、選手が理想的な練習環境のなかで競技を続けていく方法を模索することを本論分の目的とする。

第2章

この章ではトップ選手の所属先を比較し、10年間の推移を見た。すると、日本選手権入賞者では一般種目では企業に所属している選手は少ないが、国際大会では多くなることが分かった。長距離種目ではどちらも企業所属が多い。また、10年間の推移をみると一般種目・長距離どちらも企業所属が減少していることがわかった。このことから、企業所属選手は減少しているものの、企業スポーツは日本陸上競技界を支えているということが分かった。しかし日本選手権入賞者でさえ、企業になかなか所属できない一般種目に関しては、他の方法で競技環境を整える方法を考える必要があると結論付けた。

第3章

この章では企業の実業団保有目的の観点から、なぜ一般種目と長距離種目に差が出るのかを調べた。その結果、企業の実業団保有目的は、社会・地域貢献、社内活性化・広告宣伝であり、一般種目は社会地域貢献では優れているものの社内活性化・広告宣伝において長距離種目に劣ることが分かった。

そして、それが一般種目と長距離種目の差になっていると結論付けた。

第4章

ここでは、実業団以外の方法で競技環境を整える方法について考察した。1つは独立採算型クラブチームであり、新潟アルビレックスRC・T.A.P・セカンドウィンドAC・日本ランナーズを例に出した。独立採算型のクラブチームの主な収入源は会費であり、会員の確保が重要であるとわかった。成功しているクラブはそれぞれの強みをうまく生かしつつ会員を増やしていた。例えば新潟アルビレックスRCは、他の競技のプロスポーツクラブのブランドを、またセカンドウィンドACは世界レベルの選手が所属していることなどである。

次にプロ選手について考察した。日本のプロ選手はまだまだ少なく、始めて「プロ宣言」したのはマラソンの有森裕子で1996年のことである。その後、マラソンの高橋尚子、400mHの為末大、ハンマー投の室伏広治、棒高跳の澤野大地が続いた。高橋・為末・澤野はフリーな立場でスポンサーと所属契約をしているが、室伏はミズノに残ったまま他者のCMなどに出演している。

第5章

この章は日本において多くの選手が競技を続けるために、魅力ある大会の創出を目的として考察した。世界の一流選手が出場するような大会を調べ、1970年代にあったプロリーグ、2007年にフランスできたプロリーグについて調べた。そして日本の大会の現状を調べたうえで、日本でも国内リーグを開催することを提案した。国内リーグの目的は興業として成功させることで陸上人気を向上させることである。

第6章

これまでの章をまとめ、団体戦による国内リーグ発足による、陸上競技の人気向上により多くの選手が競技を続ける環境が整うと結論付けた。今後、陸上競技が発展することを望む。